

# 大友氏フォーラム

「豊の国・大友氏の魅力について」

平成23年9月18日



**NPO法人 大友氏顕彰会**

# 大友氏フォーラム

## 「豊の国・大友氏の魅力について」

平成23年9月18日（日）

PM2:00～5:00

大分文化会館3F小ホール

### 出演者

- 鹿毛 敏夫氏（国立新居浜工業高等専門学校准教授）
- 武富 雅宣氏（大分市歴史資料館副館長）
- 坪根 伸也氏（大分市教育委員会文化財課主幹）
- 牧 達夫氏（司会：NPO法人大友氏顕彰会理事長）

### テーマ

- ① 大友氏に関する最近の話題（一部画像）
- ② 大友氏の魅力について
- ③ 大友宗麟の人物像（一部画像）
- ④ 大友氏の海外交流
- ⑤ 府内大友氏遺跡から見えるもの（画像）
- ⑥ 大友水軍について（一部画像）
- ⑦ キリスト教と豊後
- ⑧ 好きな有力家臣（武将）は・・・
- ⑨ 大友氏顕彰会に期待するもの・・・アドバイス

### 牧理事長挨拶

みなさん、こんにちは。（会）5月15日に発足したばかりですが、本年度一大イベントである大友氏フォーラムに、大勢の方々に詰めかけていただき感激しております。いつも言っていることですが、大友氏400年ということが今一つ大分市民にあるいは大分県民にまだまだ定着していない。素晴らしい歴史、素晴らしい文化、素晴らしい人物、素晴らしい物語がいっぱいあるが、浸透しきれていない。そういうことで今回大友氏顕彰会を立ち上げた。おかげさまで副理事長が報告しました通り、会員は180名。私はいつも檄を飛ばすが、来年が300人、その次は800から1000人（をめざす）。これぐらいしないと大分県下に広まっていけないなと。まだまだ今は大分市が中心だが、一番ゆかりの深い豊後大野市あたり、まだ私は募集に歩いていません。大分市以外は臼杵、佐伯、由布市、東京、福岡は会員が入ってくる。大分県下をまわるのは来年一年かかると思う。底辺をあげて、広めてそして一つの夢でありますNHKの大河ドラマ、これに向かって邁進していきたいと思う。それには県民がこぞって一緒になって運動していかないとなかなか到達できないと思う。私の目の黒いうちに何とかならないかと思っている。これは神のみぞ知ることになるかと思えます。それはさておき、会の活動として毎月の定例学習会、そして調査研究班として先だって大宰府、柳川、由布市、野津のキリシタン墓、津久見、こういうところに行って来ました。これから来年、再来年各地

域にも回ろうと思っている。お手元の資料にテーマを書いています、今日は3人の専門の方々に来ていただきましたが、わずか2時間ちょっとですからこれは何回も続けていきたいと思います。来年も再来年も何回もやっていく。楽しみにしていただければと思います。今日はよろしく願います。

#### 友好団体ご挨拶

NPO法人 文化財調査保存協会 専務理事 宗公一郎様

みなさん、こんにちは。友好団体ということですが、実は私どもがNPO法人を立ち上げた経緯というのは、歴史文化を専門家の研究課題だけでなくみんなで活用して町おこしをしたいというものであった。その中で私どもを指導してくださいました加藤貞弘先生が、長いこと牧さんといっしょに古国府歴史文化研究会をやられているということで、紹介され知り合いになった。私どもの方が少し早くNPO法人を立ち上げたので、大友氏顕彰会を法人格にされたらどうですかということで立ち上げのお手伝いをさせていただいた。文化歴史を通して町おこしに取り組んでいく団体が増えていくことを大変心強く思っています。大分の歴史を語る上では、大友氏が大きなポイントを占めると思う。是非牧さんたち大友氏顕彰会のますますの発展を期待して挨拶にかえさせていただきます。

大友歴史保存会 会長 木下和子様

みなさん、こんにちは。私は個人的に九州七県を3循環しまして歴史と文化に基づいた観光についてずっと学んできた。その中で大分にはどうして魅力がないのかなと感じていて、3年前から大分市に旧跡巡りということでボランティアガイドさんを育てていきたいという夢がわきました。その中で大友宗麟公の素晴らしい歴史の中に、大分が観光に結び付けていける素晴らしい魅力に気付くようになった。そしてボランティアガイド遊学会というのが生まれた。今20名の会員のみんが一生懸命旧跡めぐりの勉強をしながら励んでいる。そして大友氏顕彰会が誕生しました。大分には素晴らしい魅力、宝があることを我々は知りながら大分の街づくりの中には、歴史に基づいた顕彰もなく目立つ場所もない。今日お越しの鹿毛先生が、武富先生が、坪根さんがいつも望んでいるのは、大分市民が、大分県民が誇れるものをどうか皆さんに伝えていきたいということ。これを大友氏顕彰会とともに伝えていく努力をしていきたいと思います。今日講演を聞いて、ますます勉強させていただき大分が一つになるように(活動する)。(そして新しく)大分応援隊大友歴史保存会が誕生した。会員は100名以上います。大友氏顕彰会の会員が180名、合わせて280名の方々が一緒になれば大きな魅力を生む原動力になると思う。大友宗麟を一つのキーポイントにした街づくりに皆さんと一緒に励んでいきたいと思います。どうか大友氏顕彰会共々ご協力をよろしく願います。

牧 始める前に、宗さん、木下さん、力強いメッセージありがとうございました。今後ともよろしく願います。テーマに入る前に、まず最近の研究も含めて自己紹介をお願いします。

(自己紹介)

鹿 みなさん、こんにちは。今日登壇している3名はそれぞれ研究分野が違う。私の分野は文献史学と言って古文書資料を読み解きながら、そこからわかる過去の時代相を明らかにしていくというもので、もう2、30年も前の大学生の頃から大友氏を研究している。最近の研究についてですが、日本国内いろいろ調査をやってきたが、大友氏をやっていくと自分の研究エリアが日本だけではおさまらなくなってしまう。中国に行くと、中国のここにこんな大友氏関係の資料があるということで

実際現地に行って調査をする。あるいは東南アジアまたはインドのゴアという所に大友氏が派遣した海外使節が滞在したということで現地に行ったり、さらにはご存じのとおりポルトガルは豊後と交流があるが、2、3年前からポルトガルやスペインで資料を発掘したり。最近はこういう言い方が適切かどうかは分かりませんが、世界史の中の大友時代が一体どういう位置にあるのかというのを最近の研究している。今日はその一端がお見せできればと思います。

武 私は歴史資料館という職場にありまして、歴史を物から伝えるという役割。大友氏関係ということでは古文書の収集ということが中心になるが、まだまだ知られていない資料がポツポツと出てくる。そういった一つ一つの資料を見ていくと、今まで知られていないようなことがちらちらと見えてくる。そういったものをうちの講座の中で紹介したりしている。皆様がこのフォーラムを通じてそういった大友に関する一つ一つの資料に興味、関心をもってもらおうと私がここにいる意味があるのかなと思う。

坪 大友の発掘を担当している。二人と違い、考古学つまり発掘による出土品から大友の歴史を考えていこうという立場。大友豊後府内の発掘調査も今年で15年目をむかえ、その間、町場のあとだけでも100箇所を超え、大友館内は26箇所ぐらいの状況。中世の歴史というのは皆さんご存知の通り福井や広島有名な先行する中世遺跡が過去、全国いろんな所で調査が行われているが、ここ15年の豊後府内の状況を見ますとそういった都市とはまた違う、先ほど鹿毛さんの方から「世界の中の」という話がありましたが、本当に日本国内にとどまらない、世界に直結するような出土品が出ている。それが一つ豊後府内の大きな魅力。今日は時間が限られていますがそのあたりをお伝えできたらと思います。それと牧さんの方から個人的に何をやっているのかということですが、発掘し始めて15年、非常にグローバルな遺物がたくさん出てくる。その中で東南アジアの焼き物がたくさん出てくる。10年ぐらい前から東南アジアの焼き物に魅せられて、東南アジアの国にぶらっと行ってはかまどをめぐることを趣味としていたが、ここ2年仕事で行けなくなっているのがちょっとストレスになっている。今日はその辺のことが話のはしはしに出てしまうと思うがご容赦願います。

牧 ありがとうございます。何せテーマが1から9あります。これが2時間半で行けるかなというのがあります。三人はお若く、司会者だけ年寄でこれを斬っていけるかなという不安がありますが、まずは①番。

#### ① 大友氏に関する最近の話題（一部画像・写真）

坪 今年5月、合同新聞でも報道された国内最大級のキリシタン墓地が発見された（写真①参照）。臼杵の野津。当時の宣教師の記録によりますと当時野津には6000人から7000人のキリシタンがいたと伝えられているが、その野津でキリシタン墓が見つかった。凝灰岩の四角い石を並べたあとが一直線上に並んでいるがその一つ一つがキリシタン墓。臼杵市の担当者に聞くと、広さもそんなに広くありません。この会場の半分ぐらい。その中に写真のような墓が37から40、50近くあるんじゃないかというような話をされていた。ここの物凄いのがですね、通常お墓があつて墓碑がありますよね、その墓碑もほとんど完全な状態で残っている状況。しかもその墓地郡の中に礼拝堂のあとまでありそうだということです。なおかつキリシタンの墓地の中には当然象徴として十字架が建てられるわけですが、その十字架を立てたらしい



写真①

写真②

円形の礫敷の空間であるとか、礼拝堂に続く礫敷の道、道路なども見つかっており物凄いことなんですね。考古学の世界ではこのキリシタン墓地というのは大阪の高山右近の高槻城で、あと東京駅の八重洲口でもキリシタン墓地が見つかっているが、そこは墓碑も見つかっておりませんし、後生の盗掘等によってあまり残りがよくない状況。そうした中でこの（野津の）墓地は、全く荒らされていない状況。当時の大友時代のキリシタン墓地がそのままあらわれた。発見されるまでは竹藪だったが、いい意味でショッキング。今、保存の関係で砂を被せている状態ですが、今年の12月から調査を再開するようで、墓地は全然荒らされていないので今度はそれぞれ(中の調査に入る)。人骨が出てくるか分からないが、副葬品などの状況が確認できると思う。また全国ニュースにつながる発見があるのかなと期待しているところです。

次、二つ目です。通常「国崩し」と呼ばれているフランキ砲、大砲です（白杵公園の大砲レプリカ写真）。白杵公園にあるのは、靖国神社にある大砲のレプリカが飾られている。最近、大砲の研究の話では、これは海外から持って来られたものではなくて、国産ではないか、もっと言うと大分で造られたのではないかということがここ数年ありました。これも新聞に出たのでご存知の方もいるかもしれませんが、「□Co」という紋章（フランシスコの略称）が刻まれた宗麟のフランキ砲がロシアで見つかった。これは鹿毛さんの方から説明していただけますでしょうか。

鹿 私の方から大砲の話を補足します。これ（写真）は、ロシアのサンクトペテルブルグという所の軍事博物館に長年眠っていた大砲で、東京大学の研究グループが別件で調査に行ったところ、ロシア側が日本から持って来たこんな大砲があるけど見てみるかということで見たところ、日本から持ち帰った大砲だということが分かった。次の（写真②参照）真ん中の上の方に見える「□（若干写真とは違う）Co」の文字。□はRとFは合わせ文字、そしてCo、フランシスコ。大友宗麟の洗礼名の略称を刻んだ大砲ということで、先ほど野津のキリシタン墓の所で写真に映っていた白杵市教育委員会の神田さんという方が、今ロシアの方へ東京大学といっしょに行ってくれています。現物の再調査をしまして、寸法をきちんと図って（図面にし）、レプリカを作りたいという情報です。

牧 ありがとうございます。今、白杵の神田さんの話が出ましたけども、来年神田さんにも講演していただこうかなと思います。次は②のテーマは大きすぎてどこからどこまで、またはどの時代で誰なのかということで極めて抽象的なテーマですが、一つの断面で結構です。お願いします。

## ② 大友氏の魅力について

武 具体的な話というのは難しいんですけども、大友氏というのは鎌倉時代から400年続いた守護です。領主制による中央史の関わりでは、豊後はもとより九州、日本全体、そして先ほど鹿毛さんたちから話が出てましたがアジア全体、大友氏を見てくると様々な歴史が見えてくる。そういったことが大友氏を研究する者にとっては非常に魅力が出てくると思います。広がりも当然ながら深さもあると思う。文化史的な面から見ても、いろいろなことが見えてくる。

坪 発掘の方から言わせてもらおうが、先ほども申し上げたが4、500年前の遺物が、豊後府内のあちこちから出てくる。どこを掘っても、東南アジア、中国、朝鮮半島などの焼き物が最近感動が薄くなるくらい所かまわず出てくるんですね。当時世界地図がつくられるかどうかという時代に、海の向こうの誰も行っただけでなく、海を渡って来た人たちのことを深く考えて、そういった人たちと積極的に貿易していこうという先進的な考え方。今これだけ情報が発達している我々ですら非常に思う所がある。情報のほとんどない時代に、海の向こうのことを慮って外国の人と付き合っていこうというような考えを持った人がこの大分にいたんだ、そういったことを今発掘していて感じる場面が非常に多いんですね。そこをもう一回、私たちの感覚ではなく、400年前、情報に閉ざされた人たちの立場に立って考えると、いろんなことを考えることができる。大友氏の魅力というよりは、大友氏の遺跡の魅力と言った方がよいかも知れないが、最近非常にそういうことを思います。それが私にとっての大友氏、大友史跡の魅力です。

鹿 大友宗麟は日本に群雄割拠するいわゆる戦国大名の一人。戦国時代(15世紀後半から16世紀4、500年前の時代)を、戦国だからとなりの大名と合戦をした、何万の大軍に何千の軍で勝ったとか負けた、いわゆる戦国時代の切り取り合戦、あるいは天下統一にむけて都に誰が早く入るかというような見方で単純に見ていたら大友氏は全く評価できない。島津には負けた。あるいは大内氏、毛利氏には非常に苦戦する。平たい言葉で言えば合戦が下手。じゃあ大友氏の魅力は何なのかというと、その15世紀、16世紀というあの時代は、いざ天下統一ということでみな京都をめざすという単純な時代ではなくて近畿より西側の中国、九州地方の戦国大名というのは確かに京都も意識していますが、こっちはやっぱりアジアが近い。中国、朝鮮半島はもうすぐそこです。大分県から東京、東北、北海道に行くより地理的に言えば、朝鮮、上海の方が近い。当時国境なんてありませんので大きな船をもってそれを操る技術があって、ある程度の財力があれば東シナ海、対馬海峡は渡ることができた。つまり今までの戦国史というのは陸上の領土の奪い取りばっかりに目をとられて見ていたわけで、そうじゃなくて海を渡ってその先にいる人といかに交流したか、そういう目で日本の戦国大名を序列付けた場合、No1にくるのが大友氏だと思います。言い方を換えれば、国内の陸上の切り取り合戦ではたいした評価はできませんけど、こういう言い方をすれば、最も国際競争力を持った戦国大名ということでは、島津、あるいは秀吉、信長よりはさらに進めた戦国大名ではないかと思えます。

牧 ありがとうございます。宗麟をはじめあの時代をですね、まあ鹿毛さんの方から別の見方がありましたが、私は文明開化の先駆けではないかと思っています。次のテーマ③も②と若干重複するかと思いますが、鹿毛先生からお願いします。

## ③ 大友宗麟の人物像 (一部画像)

鹿 では画像をお見せしながら。一般に紹介されている大友宗麟というと、この京都の大徳寺瑞宝院の

大友宗麟像。亡くなる年、晩年の、まさに入道したもの。日本の戦国大名の画像はたくさんありますが、大友宗麟というと必ずこの画像。ところが大友宗麟の画像というのは日本だけではなく外国にも残っている。ここは（ドイツ南部の Nürnberg (ニューベルグ) の写真) フランクフルトから電車などを乗り継ぎ、2, 3時間行ったところで、ドイツでは田舎で、中世のお城が残っている。正門を歩いていくと **SCHLOSS WEISSENSTEIN POMMERSFELDEN** という表示。三番目の文字は村の名前。人口1万人程度の小さな村の **WEISSENSTEIN** (ヴァイセンシュタイン城) ということ。改修されていますが地方豪族の立派な城で、この城の中に入っていくと、むこうの領主というのは有名な画家の絵を集めていまして、(写真のように) 壁にかけてある絵画室がある。いろんなタイプの絵が飾られている。この画像で真ん中の絵。二人の人物が出会う場面(写真③参照)。主人公が二人。左側に白いアルバを着て髭をはやした(人が)、相手より2段下にいます。この人と2段上の壇上から歩み寄った王様が一人。これが誰と誰だかお分かりですか。左はフランシスコ・ザビエルなんです。この絵はフランシスコ・ザビエルが、豊後の大友館を訪問して、日本の戦国大名・大友宗麟に初めて面会した時の様子を17世紀初頭に描かれた画像で、実は右の赤い人は大友宗麟なんです。先ほどの瑞宝院の大友宗麟像を知っている我々からすると何だこれほど、ヨーロッパ人と思われるかも知れないですが、17世紀の地球の裏側、ヨーロッパでは、フランシスコ・ザビエルと大友宗麟の出会いというのはこういう風な絵画に描かれて記録として残されているということ。風貌は実在する大友宗麟とは異なるんですけど、西洋人のイメージの中の大友宗麟というのはこんな形だったということが分かります。これと同じような画像というのはドイツだけでなく、まだ調査できていませんけどポルトガルにも複数ございまして、もっと調査するともっと異様なたくさんの大友宗麟像が見つかるという状況を説明しました。



写真③



写真④

- 牧 今の宗麟像、殆どはじめてに近いのではないのでしょうか。外国人が描くとあんなのかかと、宗麟は、本当はどんな格好していたのかというのは今日でははっきりしていない。非常に興味のわく画像だなと思います。
- 坪 大友宗麟公は16世紀後半に亡くなって、17世紀初頭にああいう所で描かれるということではどんな人物だったんでしょうかね、武富さん。
- 武 先ほど鹿毛先生が紹介された宗麟像というのは、確か数年前、(大)ザビエル展で日本に持ち込まれた絵画だったと思います。その時に監修されていた日本大学の先生が、宗麟とザビエルの出会い

を西洋人が描いた絵ということで紹介されたと思います。その結論に至ったのが、ザビエルの書簡の中に、日本の何人かの領主たちがザビエルと出会うんですが、彼を大変歓待したというのは宗麟しかいない。他の領主たちの姿は、椅子に座った形でザビエルと対面している。先ほどの絵は、宗麟はわざわざ椅子から立ち上がって、手を差し伸べてザビエルを迎える。それから、その像は宗麟を描いたものに間違いないだろうという形で紹介されたと記憶している。鉄砲伝来が1543年、その2年後ポルトガル人が中国のジャンク船に乗ってやって来ます。その後何人かのポルトガル商人が豊後に滞在しまして、宗麟の庇護のもと大分にいた。そのポルトガル人たちからいろいろな世界情勢を学んだということが書かれていた。宗麟はその時当主の座にいなかったからそういうことができたんだと思います。それが幸いしてか、ザビエルが来ることも知っていただろうし、ポルトガル船が来航することも常に宗麟の頭の中にあっただと思います。父が亡くなった後、当主の座について正しく南蛮貿易という決断をするわけです。いろいろな面はありますが政治的な判断というのは優れていた、聡明であった。よく言われていることで申し訳ないですけど、宗麟像として私はそう考えています。

牧 宗麟像は、大分県人の中では評価はまちまちですね。三人の話にもありますように、文化的な面では当時の政治家として1, 2番であったということは過言ではないと思います。大河ドラマについても地方の時代と言い出して長い、20年になるがなかなか（できていない）。実は大分、宮崎あと秋田県だけが大河ドラマをやっていない。この三つの指に入っているというのはどうも、いい方であればよいが。その地方の時代の中で、文化的な部分を進めた大友氏の見方を我々県民はやっていかなければならない。次も若干重複しますがけれども④。大友親繁等、海外交流というのは宗麟よりも100年前にやっています。その辺の特徴をお願いします。

#### ④ 大友氏の海外交流

鹿 牧さんが言われましたが、宗麟よりも100年前どころではなく、大友宗麟よりも200年も前、鎌倉時代後半に大友氏は海外と貿易をしていた。日本の守護では最もさかんにやっており、それは貞宗の時代。大友貞宗という人物ですけど、当然豊後の守護ですけど、当時臨濟、禅宗のお坊さんというのは、単にお寺でお経をあげて仏教の法事をするのではなく、文字を書いたり読んだり語学力に優れていますので、今で言う外交官、外交僧として、守護大名の使者となって朝鮮半島や中国に行っています。万寿寺のお坊さんたちもそういう活動をしています。博多を大友氏がおさえてまして、今廃寺となって残ってないんですけど、顕孝寺という今は地名しか残っていませんが、大友家が経営するお寺がありまして、そこを経由しましてお坊さんたちが中国に続々と留学している。そのパトロンとして経済的に坊さんをバックアップしているのが貞宗。ですので大友氏の海外交流というと何でもかんでも南蛮貿易だ、宗麟だ宗麟だと言うんですけど、そういう基盤はもう大友氏が鎌倉から九州に異国警固番役として入って来て間もない時期から始まっている。14、15、16世紀の200、300年間、大友氏がやってきたアジア諸国とのパイプ役、あるいは山口の大内氏あたりがやっているアジア的な橋渡し役の上にやがて16世紀の後半にポルトガルがアジアに接近してきたことで、豊後とポルトガルとの貿易へと続く。宗麟だけを持ち上げるのではなくて200年以上も前からの大友家歴代のそういうアジアでの活動をもっと一人ひとりの当主について解明していけば、大友氏の海外交流の全体像がもっと見えてくると考えています。

坪 発掘からの方からも、出土品としては16世紀後半、宗麟公の時代の中国、朝鮮、東南アジア、ヨ

ヨーロッパのそういった文物が出てくる。13、14、15世紀につきましても、宗麟公の時代の中国は明という時代です。その前には元、大友三代頼泰がやって来るきっかけになった元寇の元という王朝が、景德鎮という所を中心に素晴らしい、美術史的に見ても非常に評価の高い焼き物を作っているんですが、そう言った物が昔の九州乳業のあった万寿寺あとを掘りますと、元時代の（優品）と言われるような物が出てくる。正に文献資料、古文書の記録と発掘の記録が合致することが海外交流の視点についても日本国内の調査で分かる。

牧 万寿寺は1300年初頭ですから、それが今発掘されているわけです。

武 禅宗文化に大友氏が早くからかかわってきたということが、海外との貿易については大きいのではないかと思う。5代貞親が万寿寺を創建して以来、豊後府内に臨濟、禅宗が広まって禅宗の僧侶たちが、海外との貿易に携わってきます。それと鎌倉幕府が滅んだ時、後醍醐天皇側にたった大友氏に対して博多の地が建武政権から与えられる。これも大きかったと思います。（朝鮮人から見た）日本及び琉球のことを書いた本の中に、大友氏のことを書かれている。時代で言いますと応仁の乱の頃1460年代だと思うが、大友氏は博多の東6000戸の土地を領有していて、西の4000戸を少弐氏が治めていると書かれている。博多の地というのは鎌倉時代から貿易港として知られていまして、当然ながら博多を基点に中国、朝鮮へと貿易船が出たり入ったりしていて、さらには琉球の船も博多に入って来たと言われていまして、博多をおさえているということは、海外の珍しい品々を得るだけでなく、海外の情勢（情報）を得ることができたということが言える。これが、延長として宗麟の時代につながっていく。

鹿 南蛮貿易の「南蛮」というその言葉の語源は、中国人が使っていた言葉。中国人は自分たちのことを中華、東側にいる日本人のことを東のえびすと書いて東夷と呼んでいる。南方は、ベトナム、タイ、ミャンマー、カンボジア、インドネシアあたりの人たちを総称して南蛮と呼んだ。南蛮貿易と言うと本来は東南アジア諸国との貿易を指す。それが何でポルトガルとスペインとの貿易に変わったのかと言うと、当時の人たちは世界地図や地球儀を知りませんので、ポルトガルやスペインは、東南アジアのマラッカとかあの辺りを経由してから来ますよね。だから宗麟の時代の人たちは、ポルトガルやスペインという国は、東南アジアのちょっと先ぐらいにあるととらえている。そういうことでヨーロッパなんだけど彼らも南蛮人の中に位置づけられて、やがてはそっちの方との貿易の方が量的に拡大しますので、南蛮貿易というスペインとポルトガルの意味にすりかわってしまったということです。本来の意味での東南アジアとの貿易というのは、先ほど坪根さんからもお話がありましたけれど、考古学の遺物でタイ、ベトナム、ミャンマーの陶磁器がずいぶん、たくさん出てきます。大友家とカンボジア国王が手紙のやり取りをして、お互いに豊後の産物をカンボジアの国王に送り、カンボジアの国王がその返戻金として大友に送ろうとしていたことが古文書に残っている。ただそれはカンボジア船が耳川の合戦直後、鹿児島島の沖から日向灘を通過して豊後に行く途中、島津軍に抑留されてしまってその荷物と船は豊後に来れなかったんですけど。とにかく豊後の戦国大名と南蛮と呼ばれていた東南アジアの国王とが対等な貿易をしていたということは古文書の資料に最近見つかったようですけど、きっちりと記録されているわけで、ですから中国、ポルトガルそしてその間にある東南アジアとの交易も今後、正當に評価していかなければいけないと思います。

牧 もう一つって休憩にします。テーマ⑤。先ほどからの遺跡（の紹介）で、15年くらいということですが、大友の文化的遺跡から府内大友氏の町がどのような様子であったか、この辺が見えてく

るのではないかと思います。その辺をたずさわっている坪根さんから冒頭お願いします。

⑤ 府内大友氏遺跡から見えるもの（画像）

坪 （画像を見ながら）先ほど出し忘れた写真で、1番目のテーマの3番目の写真です。先ほど武富さんから唐人町の話が出ましたが、府内古図と言いまして当時の府内を描いた古絵図の中に大友館のちょうど北側の部分に唐人町という町があったことが描かれています。これは鹿毛さんが専門なんですけど、その唐人町に中国人が実際居住をしていたというような記録があるようでして、唐人町、今風で言うとチャイナタウンですよ。そういったものがすでに宗麟公の時代にあったという状況。これも数か月前に新聞に出たのでご存知の方もいるでしょうが、（画像写真を見て）これ何だか分かりますか？実はこれ枕なんです（写真④参照）。これをトピックスということで書いてありますけど、今の所日本の出土例はなく豊後府内の唐人町が唯一です。向かって左が全景の写真であれがちょうど枕の側面で手前と向こうに板がありますが、真ん中の空間に布や皮を巻いて枕にしていたというような品物です。これの凄いのがですね、側面にボロボロですが漆を塗りまして、その上にさらに赤漆を塗り、その上に“そうきん”という技法の名前ですが小刀で絵を描いてその中に金箔を押し込んで模様をつくるという当時日本にはない中国で作られた枕です。専門の方に見てもらくと絵柄は分かりづらいですが、騎馬像と馬に乗った兵士の像と楼閣が描かれています。図柄とあと技法を比較すると間違いなく中国製、メイドインチャイナだろうと言われている。文献等でも唐人町チャイナタウンに中国人が住んでいたということなので、おそらく唐人町に住んでいた中国人が壊れてしまったのかどうい事情か分かりませんが、唐人町の前にちょうど大きな堀が作られており、そこに捨てられていたものが発掘で見つかった。正に豊後府内の最盛を如実に示す遺物の一つです。それでは本題に入ります。

遺跡の位置は今さら皆様に申し上げるまでもないですが、中央に200m四方の大友館があり、大分川の西側の自然堤防の上に南北2.2km東西700mの範囲に40数個の町があったということが府内古図からうかがい知ることができる。（別府湾上空からの写真～北側上空からの写真）。（そして歴史資料館が作った当時の府内の復元図で）当時の日本側の記録によりますと先ほど言いました範囲の中に5000件の家が立ち並んでいたという記録がございまして、少なくとも2万人から3万人位の人が住んでいたのではという風に思っています。それで豊後府内の特徴ですが、このあとおそらく出てくるのではと思いますが、府内古図によりますと南北4本、東西5本ですね街路に区画された非常に企画性の高い、当時の京都を彷彿させるような町が展開されていたということが分かっている。全国的な中世遺跡と比較した時の府内の町の大きな特徴を一言で言うと、貿易商業都市、今までに海外交流とかいろんな話が出てきていますが、当時の貿易商業都市として著名な所では堺、博多の貿易商業都市の性格を持ちながら、大内氏城下町の山口、織田信長の城下町安土、豊臣秀吉の大坂、こうした領主戦国大名が館を構えている城下町、この二つがいっしょになった町が豊後府内の特徴であると表現できるであろうと思っています。実はこれも私たち地元で調査し、資料を見ますと当たり前のように思えるんですけど、実は全国を見ますと貿易商業都市と城下町と一緒にいる町はおそらくない。鹿毛さん、武富さんどうでしょう？ ご存知ですか？ ないですよ。領主と商業従事者が一緒になった全国に例のない町、これが正に豊後府内の町。（次）これは、大正七年の市街図に豊後府内のエリアを黄色で示したものです。北側に黄色く着色して「沖の浜」という記載が赤字で示していますが、この部分ですよ。海外交流の話をしてきたが、南蛮

貿易の窓口になった港があった場所です。(府内古図の説明) ~守護権力もありながら他に例を見ない貿易商業都市として発達したそういう府内の絵図。(今の府内古図をもとに現在の地図に重ねた図) 街路の位置と主要な施設を落としたもの。20年前に大分市史を作るときに、大分市編纂室の方が作られたもので、その後10年たって発掘が始まったが、ほぼ9割くらいの確率でこの府内復元想定図のとおり道路がありますし、大友館も存在し、万寿寺もあるという状況が確認されている。(次) 町場の調査が平成8年から始まったわけだが、街路沿いにかめ蔵のあとが出土している。町人の活気が伝わってくる。

これは大友館と万寿寺あとの位置を現在の航空写真に落としたもの。大友館の東側に南北道路が一本走っていますが、その付近の状況についての発掘の成果をご紹介しますと思います。大友館の前にメインストリートが走っていますが、道幅が一番広い時で12mある。今の車社会であるならともかく、当時は馬はあったがそういった社会の中で幅12mの道路を、それも町の真ん中にもっていくという都市計画をしていることについても、前に戻るけれども大友氏とは何者だと言うことを示してくれる証拠の一つと考えている。大友館の前に桜町という町屋があるが、その発掘状況についてご紹介したいと思います。ちょうど画像にも○があるところに桜町という町名が描かれています。町名の下に鳥居みたいのが描かれているのが見えますか？薄く描かれています。これ実は木戸を示しています。四十いくつある府内の町は、基本的には木戸で区切られておりまして、古文書専門のお二人にあとでうかがったらよいと思いますが、町々は“おとな”と呼ばれる町内会長のような方がいまして、この段階から自治組織のような形で町々を統括していたような話をうかがったことがあります。そういった意味ではすすんだ町だということが分かります。

今見た桜町の木戸の場所を掘りますと、ちょうど南北大路と書いた南北道路、それと木戸の表記がある古絵図にあった場所で、木戸が建てられていた柱穴がその場所から出て来ました。(写真⑤参照) 右側が大友館、南北大路をはさんで左側が桜町ということになります。



写真⑤

写真⑥

(次の) 写真の奥に右から左に南北大路が走っています。右側に木戸があり、向かって向こう側が大友館で、手前が桜町の発掘状況です(写真⑥参照)。ちょうど大友館の北東の交差点部分ですが、礎石の建物が見つかっており、ここでは商取引の要になる分銅を作っていた。またキリスト教徒がロザリオを十字架といっしょに持っているが、そのロザリオにメダイが付いていた。英語で言うメダルですね。そのメダイも海外からの輸入だけでは足りなかったんでしょうね。この豊後府内のこ

の桜町でどうも作っていたらしいということが発掘で分かっている。それと他の町屋、一般の町屋というのはいわゆる短冊状地割と言いまして、鰻の寝床のような間口が狭くて、奥が長いようなのが一般的なんですけど、この角地にはですとねその3件分の敷地を確保しまして6尺5寸という「京間」という皆さん聞いたことがあると思うんですが、最先端の1間6尺5寸という尺を巧みに使いながら、その礎石による建物を作っているということが発掘で確認できている。そういった意味では、当然海外の交易でいろんな情報だとか、文物、精神的なものを取り入れながら、国内にもある程度パイプがあって、6尺5寸の京間の情報であるとか、分銅、メダイの製作も含めて、日本の中にも目を向けているというのも発掘調査で分かっている。

(写真の) L字状の礎石建物が見えます。そこでは分銅を作ったり、メダイを作ったり非常に重要な施設が大友館の前の角地にあった。こういった構造というのは、江戸時代の代表的な例でいえば江戸で見られる様相。そういった町の作り方自体が、次の江戸時代の先取りをしていた、先進的と言いますかそういった部分が見て取れる。(次の写真は)京都の町を描いた洛中洛外図屏風ですが、町は昔からよく言われますが、府内は当時の京都のような町が展開していただろうということが言えます。

次は遺物から何が見えるかということです。日本、中国大陸があって、輸入としては鉄砲、火薬、砂糖。輸出品としては金、銀、硫黄、刀剣などが文献の方からそういう状況があります。豊後府内を発掘しますと、(壺類の写真) こう言ったタイ産、ベトナム産、ミャンマー、中国の壺類が出て来ます。



写真⑦

写真⑧

当然ながらこう言った壺類は商品にはなりません(写真⑦参照)。我々はコンテナという言い方をするんですが、あくまで何かを入れる容器として豊後府内に船に乗ってやって来たということが想像できる。問題はここの中に何が入って来たかということですね。ここは考古学の限界でして、出土遺物からは推定することができないんですが、これも文献史学の方々のお力をお借りしまして、あるいは化学分析等々で次第に明らかになりつつあります。そのいくつかを紹介しますと、(写真)左下にベトナム産の細長い瓶みたいなものがあります。これは豊後府内で数十個体出ているんですが、これを大阪の堺の例から推察しますと、どうも長胴壺と呼んでいますが、これには砂糖が入っていたらしいということが推定されています。それからタイ産の壺ですが、これについては1543年に種子島を経由して火縄銃が入ってきて、鉄砲が使われるようになるんですが、その鉄砲を使

うには当然火薬が必要ですよね。その火薬というのは実は硫黄と硝石という二つの大きなものがないと成立しない。硫黄というのは先ほどの輸出品にありましたけれど、日本でもかなりよく取れるということですが、硝石は日本では取れません。ですから火薬を作ろうと思うと、海外からの輸入に頼らざるを得ません。そしていろんな文献等々を探索していくと硝石はどうも壺に入ってきたらしいという記載がございまして、そういったことを考えながら当時の東南アジア、中国から入ってくる物の中で、硝石の需要は高いですからこの需要を考えると出土量と比較しますとこのタイ産の壺、おそらくこれに硝石が入っていたのではないかという風に我々は推定しているところです。当然硝石専門の壺ではないので全部が全部硝石だったとは言い切れませんが、かなりの確率で硝石が入っていたのではと考えております。因みに最近、この同じタイ産の壺、京都でもたくさん発掘されているんですけども漆が（はっちゃく）している分がありまして、その成分を分析しますとミャンマーの漆が入っていたということが分かっておりまして、当然硝石を輸入するための容器として使われていたのは間違いないと思うんですけども、ミャンマー等東南アジアの漆なども運ばれてきたということが化学分析の方から分かっています。

（次）（写真⑧参照）トラディスカント壺というのがこの豊後府内から数個体出土しておりまして、全国の中世遺跡の中では群を抜いて数が多いということで、豊後府内を象徴する遺物の一つとなっております。タイ産の四耳壺については、お話ししたように硝石が入って来たんだらうと、一説にはお酒を入れてきたという話もありまして、それもなかなか否定できませんが、お酒ですとか漆とか硝石とか入りましてこの豊後府内にやって来たんだらうと考えております。

（東南アジアの地図）こういった所から船に乗って今の壺が入って来るという状況が認められます。それと東南アジアの出土遺物で、いわゆるコンテナとしての壺を説明させていただいたが、この豊後府内が他の貿易都市とは出土遺物の点で大きく違う点がもう一つあります。実は商品としての中身を運ぶためにやって来た壺、それ以外にも先ほど見ていただいたトラディスカント壺という非常に色鮮やかな壺というのはそれ自身が商品となってこの豊後に持ち込まれたと思うんですけど、この豊後府内にはですね、東南アジアの人、中国の人が自分の生活をするために持って来たんだらうと思われる商品には成り得ない中国産の鉢であるとか、小さな壺、タイ産の鉢、壺そういったものが所々出てきます。こういった状況というのは商品にならない、一緒に船に乗って来た人が、例えば皆さん旅行する時歯磨きなんかを持って行きますよね。そういった感覚で持って来たものがこの豊後府内ではあちらこちらから見つかる、そういった状況が他の中世遺跡とは、あるいは貿易都市遺跡とは違う大きな特徴と言えます。（次）それ以外にはですね、ガラス製品、火縄銃の部品、漆器、将棋の駒、あと珍しいところでは指輪も出ています。これ（指輪）もどこ製か分かりませんが、場合によってはヨーロッパまでいくことも考えられます。上のガラス製の小皿については分らないんですけども、今日は写真を持って来てないんですけど、大分県の調査ではベネチアガラスが出ており、明らかにヨーロッパから持ち込まれたであろうとするガラス製品もありまして、そういった意味でも貿易の広がりというものをですね、出土遺物から知ることができます。（次）これも貿易に関係する遺物なんですけど“もっこう型”と言われる景德鎮製のお皿です（写真⑨参照）。真ん中に字が書いてありますよね。「天文年造」と書いていると思うんですけど、実は天文というのは日本の年号なんですよ。おかしいですよ。中国の景德鎮で作っているのに何故か日本の年号が入っているという非常に珍しいんですけど、豊後府内だけでなく堺や大阪でも出土しています。これは何でだろうということで文献を調べていきますと、1550年代弘治年間、鄭舜功という人が中国から

後期倭寇の鎮圧要請に豊後に来ます。その方が半年ほど豊後に滞在するんですけど、その時に見たり聞いたりしたことをまとめた「日本一鑑」という書物があります。その「日本一鑑」を見ますと鄭瞬好が、悪徳中国商人がですね日本人がこういう“もっこう型”でしかも日本の年号を書いている中国製のこういったお皿をですね、非常に好んで高額で買ってくれるということで豊後府内に居た時のことを書いていると思うんですが、悪徳商人が仲介として景德鎮に注文して作らせている。豊後府内の当時の日本人が高いお金を出して買ったと思うんですね。ところがですね、当時景德鎮の製品とこれ（写真の皿）を比べてみますと決して良いものではない。どちらかと言うと粗悪品と言っていいくらいの、釉のあがりだとか、焼き方だとか、形もそうなんです、そういった高額で買わされていた事件というか状況があったということ、鄭舜功という方が書かれた「日本一鑑」という書物から知ることができます。

牧 豊後大友氏の府内の町というのは、今のご説明でかなり皆さんお分かりになったかなと。極めて近代的というか、要するに時代の先駆け、もちろん海外との、東南アジアとの交流もこれありで博多に匹敵するくらいの町があったということが分かると思います。



写真⑨



写真⑩

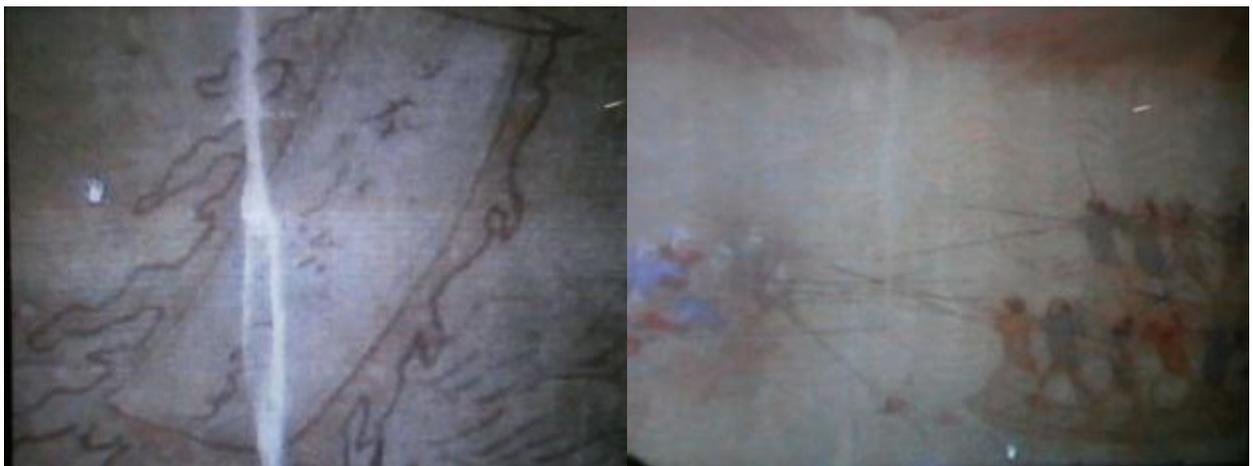
#### ⑥ 大友水軍について（一部画像）

牧 後半の部、再開いたします。大友水軍というのは佐賀関の若林、日出町の渡辺、辻間水軍、国東の岐部水軍、大友政権にとって大友水軍というのは極めて重要な役割を演じたものと思います。その中で、特徴的、他の大名と違った部分があるのではと私は思います。鹿毛先生からお願いします。

鹿 国東とか別府湾の日出の真那井という所に渡辺一族のたくさん古文書が残っています。あるいは辻間というところもそうです。さらに海部水軍いわゆる佐賀関、臼杵、津久見の県南、リアス式海岸の入江に、昔の海の漁師が豊後水道にたくさん住んでいたわけで、そういう人たちは大友氏が入って来る以前から当然その地域に住んでいた人たちもたくさんいまして、やがて大友という守護が豊後の府内の大分市に本拠をかまえて、豊後の守護から守護大名となり戦国時代に拡大していく段階でその家臣の中に組み込まれていって、特に戦国時代のような戦いがしばしばあるような時代相の中で彼らが水軍と呼ばれる。陸上の合戦にも当然従軍しますけれども、特に海を挟んでの敵との戦いの時に船合戦をする。やはり陸上の戦いに優れていても、船の上での戦い方が上手かというところではない。船の上では特殊な条件がありますので、普段からそういう生活をしている人でなけれ

ば上手く軍を進めることはできないし、敵に勝つこともできないということだと思います。それで豊後大分県の大友氏の政権の中に組み込まれた海辺の領主はたくさんありますから、たくさんの古文書も大分の場合は残されています。それらを分析すればずいぶんと当時の人たちの生活の様子、実際釣った魚を殿さまに届けたりしていることもありますし、日常的には船を使って戦いが無い時は、いわゆる今でいう宅急便屋さんみたいな仕事をしています。府内から日出まで米を送りたい、じゃあこの時は水軍ではないですけど仲間水軍の船を持っている漁師に運んでもらうとか流通を担っているのも水軍の姿です。漁民でもあり、運送業者でもあり、そして戦いの時には槍、刀を持って敵と戦う。そういう今のように職業が分離している時代じゃありませんので、いろんな側面を持っていたのが当時の戦国時代の水軍だと思います。その中で古文書はたくさん残っていると言ったんですけど、一つ今からご紹介したいのは、これはまだ学会で発表しておらず来月東京で国際研究会があって、そこで正式に発表するんですけど、大友水軍らしき人たちの姿が、古文書のような文章ではなく画像として記録されているというものが去年見つかりましたので、本当はこの画像も正式には使ってはいけないんですけども、今日お集まりの皆さんに特別記憶だけにとどめておいていただければと思って持って来ました。紹介したいと思います。

これ（画像）は、場所は中国です。故宮、昔の紫禁城を斜め上の建物屋上から撮ったもの。昨日か、一昨日 SMAP（スマップ）が行ってましたよね、国賓級の扱いを受けて。これ（次の画像）は去年できたばかりで非常に新しいナショナル・ミュージアム・オブ・チャイナ、つまり中国国際博物館（写真⑩参照）。中国政府が国の威信をかけて去年、天安門広場の前に造った。彼らの説明では世界最大級の博物館だと自慢していましたが、確かに本当に大きな建物で、去年オープンしてそこに行って来ました。この博物館が所蔵している絵巻物がありまして、当然これは400年前のものでありまして画像が悪いんですけども、船に乗った向うの軍とこちらの軍で槍のつき合いをしている画像です。（向かって右の軍）船の中に旗を立てて、これちゃんと鎧を着てますよね。中国の正規軍です。16世紀の明の官軍です。それに対して（写真左の軍の）船に乗った人たちはどんな姿をしているかということ、弓や槍を持って中国軍と戦っていますよね（画像では裸の水軍兵たち）。



写真⑪

写真⑫

じゃあ一体誰が中国軍と戦っているかと言いますと、この船が旗を掲げていますが、（見える文字が）“日本”ですよね、その下に年号が“弘治”とあり、かすれてその下に〇年とあります（写真

⑩参照)。日本の弘治〇年という年号を掲げた船ですから、この裸でやり合っているのは日本人なんです。日本人が中国明の官軍と海の上で戦っている絵です。向こうでは、中国国際博物館ではこの絵を「抗倭図鑑」、中国に攻め入った倭人に抵抗、攻めて来た倭人の攻撃を防ぐ様子を描いた絵巻物という意味です。これと同じような画像は、実は中国だけでなく、ずいぶん前から日本でも「倭寇図鑑」というのがあるんです。(次) (写真⑪参照) これは日本の東京大学がもう戦前から持っている「倭寇図鑑」です。構図が全くいっしょです。ただ左右が入れ替わっています。(向かって左の軍) 赤や青の服を着ているのは16世紀明の官軍、中国軍です。右側の軍ですが今度は服を着せてもらってますけど(笑)、さっきより扱いがいいですね、でもやっぱり一人海に落ちて今突かれています、溺れています。で、これ「倭寇図鑑」、明の官軍と日本の倭寇が中国沿岸で戦っている様子。左右が入れ替わっていますが、殆ど同じ構図の絵巻物が日本と中国に存在するということなんです。この日本の「倭寇図鑑」はずっと絵巻物ですから、一応ストーリーがあるんですよ。(それは) 遙か東シナ海の向こうから倭寇の船が次第に近づいて来て中国の海に上陸して、そこで略奪行為をしているのを明の官軍がこらしめて、退治するというストーリーなんですけど、その最初の所が次の写真です。右上の遙か彼方から小さい船に乗って倭寇たちがこっちの中国の方にだんだんとやって来ます。その倭寇の船、日本人らしき人が弓や刀を持って武装しています。一応服を着ています。彼らは旗を掲げているんですけど、(その旗には) 肉眼では文字が見えませんよね。これ倭寇というけれどいつの倭寇か分らなかったんです。ところが中国の先ほどの「抗倭図鑑」に“日本弘治”という年号があったのでもしかしたらここにも文字が彫られているんじゃないかということで、東京大学の研究グループがこれの赤外線写真を撮ったんです。それが次です。旗の部分を拡大すると、肉眼では見えなかったんですけど同じ“弘治の年”、“の”のような文字が何と解釈するのか見解が分かれているんですけど、やはり日本の弘治年間という年号が彫られている。ですから日本にある「倭寇図鑑」と中国国際博物館にある「抗倭図鑑」という二つの倭寇を描いた絵巻物は、弘治年間の日本から中国にやって来た船だということになるんです。では弘治年間というと、これは結構短いんです。弘治元年から3年までしかないので非常に限定されるわけです。西暦で申しますと弘治元年というのが1555年、弘治3年が1557年ですからその3年間に中国に行った船、攻めて行った船ということで、じゃあ文献資料でその時期に中国に攻め入った記録、派遣された記録が残っていないかということで次。文献資料の中国の資料ですけど、「日本西海修理大夫源義鎮差僧徳陽求貢」(とあります)。義鎮とありますが、宗麟です。“差”とは派遣するという意味で、徳陽というお坊さんを弘治年間派遣して、“貢を求む”というのは貢物を持って来て貿易したいと要求してきたという風に記録されているんです。この時、大友氏だけではなくて大内氏もいっしょに中国に渡っているんですけど、ということは先ほど中国と日本の絵巻物に描かれている人たちは確定ではないんですが、私の主張では大友水軍の人たち。その人たちが中国に行った時の様子を中国側が記録している。彼らが中国の港に着いて、最初は朝貢貿易したいと中国に申し出たんです。ところが、当時明は海禁政策、分りやすく言えば鎖国をしていますので貿易はさせないと、ちゃんと10年に1回しか勘合貿易をしないという規定がありますので、断られるんです。そうすると大人しく帰るわけにはいかない、はるばる中国まで行って何もしないという分けにはいかないの、どうするかと言うと警備の手薄な浙江省、福建省あたりの南方の海域に行って、そこでいわゆる認められていない密貿易をする。彼らが(写真にて) 今ここで上陸しています。次(の画像)、真ん中辺、中国の警備の手薄なところをこのように、例えばこの人、何か担いでますよね(写真⑬参照)。



写真⑬



写真⑭

漁村を襲撃して、正式な貿易が認められないから仕方ないんです、略奪してるんです。おそらくいろんな宝物が入っているんでしょう、(画像の) 下の方の倭寇たちも二人で何か風呂敷包み、何入れているのか分かりませんが右上の人は何か担いでいます。これ大友水軍なんです(笑)。中国人からするとこういうわけですよ、認められていない貿易を拒まれて、沿岸警備の手薄な南方に行って、そこで密貿易をする悪い奴だという意味で“倭寇”と彼らは名付ける。大友側とすれば、水軍側とすれば本当はそうじゃなく、きちっとした貿易をしたかったんですけど、そっちが認めてくれないから中国人の密貿易者と取引する。でもそれは明政府からすると犯罪者なので、絵巻物の上ではこういう風に実際に略奪したこともあると思います。実際後期倭寇と言って非常に大きな略奪が続いた時期もあります。とにかく中国では、大友水軍は倭寇として描かれている。次の写真は、これ紹介していいかなんですけど、大友水軍というのは明からすれば悪者です。海賊なので捕まえないといけない。で、捕まえられています。(画像では) 赤い服を着て偉そうな人が、馬に乗っています。これは中国南方浙江省の支配統治している役人です。役人が今、港にやって来て、そこに片足をついて報告している軍人が一人いますね。向こうを指差して「今、悪い倭寇を捕らえました」と報告しているんです。捕らえられた倭寇が3人・・・これが大友水軍(笑) すいません(笑)。捕らえられた人たちは手を後ろ手に、ふんどし一丁にさせられて、紐で引っ張られて連行されている画像です(写真⑭参照)。もっとグロテスクな画像が出てくるんですけど、これ以上大分で紹介すると大友水軍の末裔の方に不愉快な思いをさせるので、これ以上紹介しませんが、もっとひどいのがありますが、つまりこの新発見は、今まで古文書でしか水軍のことが分らなかったんですけど、「倭寇図鑑」の絵巻物の世界で、郡部のどこの水軍か分かりませんよ、佐賀関なのか、日出なのか、国東なのか、水軍の人たちが明軍と戦っている、中にはこうやって捕虜となって捕まった人たちもいる。画像として初めて大友水軍が、歴史に残されているのが見つかったということ。ちょっと時間をとってしまいましたが、一番ホットな研究成果ですので紹介しました。

牧 鹿毛先生の未発表の特別大サービスです。我々が一番最初に見ましたからね。大友水軍が全部倭寇で、密貿易をずっとやっていたわけではないですけどね(笑)。そこは誤解がないように。二人ぐらい末裔の方がいらっしゃいますので。これがホットニュースで、サービスでしたので、また水軍の話は別の機会にあると思います。それで何と言っても豊後と切り離せないのがキリスト教ですね。大友宗麟がザビエルに邂逅して、生涯心の友であるアルメイダ、宗麟が死ぬまで何十年も付き合いしてますね。それを通じて宗麟は最終的に1578年にクリスチャンになるわけで、そのあと日向で

惨敗するわけですが、豊後のクリスチャンの数というのは逆に日向の戦いに負けた後の方がむしろ増えています。1580年代から江戸の初期にかけて、信者の方が増えている。キリスト教と大友氏というのは、これだけでも3、4時間かかると思うんですけど、武富さん、お願いします。

## ⑦ キリスト教と豊後

武 キリスト教の問題というのは非常に難しく、ただ牧さんの方からもお話があったように、高城の耳川の合戦以降、キリスト教徒が増えたというのはそうだと思います。特にバリニャーノという(巡察師の)方が来られまして、日本の布教区を3つに分けます。一つは都、一つは豊後、九州以外の地域をシモ区という形で分けて布教を進めるわけなんですね。特に豊後は天正9年から10年にかけて臼杵にノビシャドと言われるものをつくって、府内にはコレジオというものをつくって宣教師の養成機関をつくっていくと。それだけ豊後の地というのは今後布教が進む場所だという風に認識していたようです。

坪 これは遺跡のところの説明しましたがけれども、大友館の桜町という町ではメダイを作っています。そのメダイが鉛とスズの合金で作ってるんですけども、その鉛につきましては最近別府大学の調査によると、タイの鉱山から採取した鉛だということが分かっています、そういった南蛮貿易で持ち込んだ鉛を使ってメダイ、ロザリオにつけるメダルを作っている状況も確認されておりまして、海外から輸入されるメダイだけでは足りないくらい、おそらく信者の数も増えたので大友館の前でメダイを作らざるを得なかった。それと向うのメダイからしたら粗悪です、非常に簡略化したものなんですけど、そういうものを作らざるを得なかったほど、当時府内の町に信者が多かったことの間接的な証しになるだろうという風に考えているところです。

鹿 キリスト教の重要な問題は、今こういう風にすごい、発掘成果が続々と出て来まして、ようやく研究ができるような状況になってきていると思います。一方私たちが専門の古文書の方では、まだまだこれからというところでして、私どもの大先輩の文献史学の先生で、大分大学のもう亡くなられましたが渡辺澄夫先生、それから加藤知弘先生。渡辺先生は日本史の大家というか、豊後大友氏の方を書かれています。加藤先生は西洋の文献から大友氏を書かれた本が数冊あります。御二方が30、40年前に書かれた大友時代像というのが全くリンクしないんですね。それは渡辺先生というのは非常に実証史学の先生ですので、古文書に残っていないことは絶対に語らない、古文書に記録されていればということで、キリスト教というのは江戸時代、それが残っていると平たく言えばやばいんで、その資料を全て抹殺していますので残っているはずがないですよ。豊後にあれほど大友時代、日本のキリスト教の一大宗教センターができていたはずなのに、古文書資料に全く残っていない。江戸時代、禁教令が出されて以降、そんなもの家に残っていたら磔にされますから処分すると。で、現代になって我々が、古文書の研究者がさがしてもさがしても見つからないのは当然なわけで。ですから日本史の面ではキリスト教の豊後の歴史というのは全く書けない。ところが西洋史をされている加藤先生は、西洋の動きのたくさんのが、ザビエル以降のアルメイダのこと、フロイスのことが残っていますから自由に(書ける。しかし)宗教というのは広める観点から描いているので、それをそのまま100%信用して、その時代像を描くと宗教は偏りがあるので信用するわけにはいかない。今までは西洋史を研究する研究者と日本史を研究する研究者とでキリスト教の豊後の布教というのは、全く乖離していてその間をようやく埋めるようになったのが今、坪根さんが紹介していただきました考古学。「ああ、やっぱり大分にキリスト教が広まっていたんだな、

教会もちゃんとここにあつて、コレジオもあつたんだろうな」ということがようやく考古学がメスを入れた。ここは考古学にがんばっていただくしかなく、是非この先、府内の教会の敷地跡、コレジオがあつたあと、難しいですね、調査、発掘するチャンスがあつたら是非、調査していただければ、これはすごい成果が出てくるだろうと期待しています。

牧 それじゃあ坪根さん、今後もひとつよろしくお願いします。大友氏と言つたつて400年、随分あります。武将と言つたつて何十人、何百人います。宗家だつて22代いますから。「好きな武将は誰か？」と言つても今日皆さん100人来られてますけど、ひょっとしたら一人ひとり違うかも知れない、多分違うと思いますけど、今日は特に一人だけあげろと言つても難しゅうございますが、御三方からですね、私はこの人に興味があるとか、あるいは好きだというのをあえてしていただきたいと思います。

⑧ 好きな有力家臣（武将）は・・

鹿 この所の所はですね、歴史の事実ではなく自分の思い入れで、多少嘘をついてもいいということをはかっていますので、私がもし大友氏の大河ドラマの原作を書くとしたら、どこに重点を置いて書くか、そういうイメージで申し上げたいんですが。私が取り上げたいのは、宗麟ももちろんそうなんですが、宗麟の弟です。あまり知られていないんですが、晴英と書いて「はるふさ」と読むんでしょうけど、実の弟です。お兄さんは大友家を継ぎました、この弟はどうしたかと言うと、皆さんお詳しい方もいるかと思いますが、山口の大内家が陶晴賢の謀反によって、大内義隆が下剋上にあつて滅びます。その後、そこに政略的に入つて行つた。つまり山口の大内家の当主になつたのが宗麟の弟です。これは向こうでは大内義長を名乗ることになるんですけど、どういうことかと言うと豊後にお兄さんがいて、周防、山口に弟がいて大内家にいる。ということは大友家と大内家の二つの西日本での戦国大名両国が、血のつながつた二人の兄弟によって運営されている時代があつた。これは天文21年から弘治3年までの、西暦で申しますと1552年から1557年までのたったわずか5年間なんですけど日本の歴史上あつたんです。これを私は勝手に「兄弟戦国大名連合」という風に名付けているんですけど、大友家と大内家が連合を組んだら、日本にその当時敵はないんですね。それぐらいの強大な、権力の大きな大名権力が山口と大分にできて、今日は時間がないので画像は紹介しませんが、やっぱり中国に貿易船を出している。その時、大内氏は日明勘合貿易の日本国王の印を持っているんです。日本国王になりすまして中国の皇帝と朝貢貿易をしていますから。当然弟の晴英はそれを使い、お兄さんの義鎮といっしょに中国に巨大船を造つて貿易しに行つています。なのでそういった山口と手を組んだ所に焦点を当てて大友時代を描くと、壮大なスケールの大河ドラマができるんじゃないかと僕は勝手に思つて弟を紹介しました。

牧 これが5年ではなく、毛利から潰されないでいっとつたら実現できていたんだろうと思います。歴史は過酷ですから、でも面白いですね。そういう見方というのは面白かつたと思います。参考にさせていただきます。

坪 私の場合にはなかなか大河ドラマになるような方ではないかも知れませんが、（画像）文書の抜粋を持って来ました。これが天正十年、西暦で申しますと1582年、（織田）信長が本能寺で明智光秀に殺された年です。宗麟公の息子の友友吉統が、家臣の柴田礼能に条々を出している抜粋です。私が興味のある武将がこの柴田礼能という方です。その条々を見ますと「一、万寿寺築地の内井に西の屋敷両所、所望せしめ候の事」「一、一府の内、万寿寺町屋敷の事、残る所なく預け置き候事」

という風な表現があります。文献を研究されている二人にむしろこの解釈をお願いしたいんですが、どうなんですかね？ 諸説ありますが一つの解釈としてはまあ、万寿寺の領地を取り上げろというようなお話なんじゃないかなと解釈いただいている部分もあるんですけども。実は1582年天正十年、大友宗麟が天正六年1578年に耳川の合戦にあたって、ドン・フランシスコという洗礼名をいただいて改宗しますよね。それ以後ですね、万寿寺は菩提寺であるわけなんですけど、どうも関係があまりよろしくなくなるという状況がありまして。発掘の方ではですね、ちょうどそのころを境に万寿寺の(周りに)幅8m、深さ3mの堀が掘られます。これは誰に対する堀かと申しますと、おそらく大友宗麟公がですねキリスト教に改宗したということで、宗家との関係悪化も踏まえてのことだと我々考えているわけですが、そういった状況の中で万寿寺というのは天正14年、島津氏の府内焼き討ちで完全に焼かれてしまうんですけども、実は宣教師の記録を見ますと天正10年かあるいはちょっと前に大きな火災にあっているんですね。どうもこの文書、条々等を考えますと、吉統が柴田礼能に、当時府内の町奉行的な役割をどうも果たしていたようでして、またこの礼能は敬虔なキリシタン、柴田リイノという洗礼名で非常に宣教師たちと仲が良かったと言いますか、褒めたたえられていると言いますか、崇敬を集めていた家臣のようでありまして。槍の名手ということで、宣教師から「豊後のヘラクレス」という異名までもらった方。そういった中でこの条々を見たり、礼能が敬虔なキリシタンだったということを考えたりあるいは一説によると、この柴田礼能さんが、天正10年の万寿寺の大きな火災では、火をつけたのではないかということが一部にあるような状況がありまして、そういったことから興味があるということで今回あげさせていただきました。因みにこの柴田礼能という方、一説によりますと島津がこの豊後に攻めてきた時、丹生島城の大友宗麟の元におりまして、たまたま一族の者が島津側に寝返ったものですから、それを恥じて本人と息子両方とも島津軍に突っ込んで行って討ち死にしたと言われている、そういった家臣でありまして、ちょっと興味があるということであげさせていただきました。

牧 柴田礼能、今日ひょっとしたら初めてお聞きになった方もあるかと思いますが、非常に興味のある男、私もそういう風に思っております。

武 あえて一人と言われるとですね、なかなか資料の制約がありまして、一人ひとり歴史の中に埋もれている人をですね拾い上げていかなければならないんですけど。あえて一人をあげるとなりますと、豊州二老、あるいは三老の一人に数えられている臼杵鑑速がおもしろいかなと思っております。先ほどの府内古図の中に寒田鎮郷と鑑速、屋敷が描かれているのはこの二名だけなんです。皆さんよくご存知の立花道雪が、当時筑前経営をやっていますけど豊後府内にいます重臣十二名に対して檄文を出しているんですね。その中に鑑速と吉岡宗敏の二人が亡くなったあと、国の政策は正しく無道であると、それがたびたびある戦において負け戦になると。それだけ立花道雪にとって臼杵鑑速という人物は、大友家の支柱として、重きをなした人物として語っております。実はその臼杵鑑速が若かりし頃、大友宗麟が13代將軍義晴から一字をもらいまして義鎮と名乗るんですけど、その返礼の使者として京都に上っているんですね、若かりし頃。そういった中でですね、京都の情勢についても通じていたようです。その時かどうかは分かりませんが、有職故実と言われるようなもの、そういった書物もですね手に入れているようです。大友宗麟は、茶の道にも通じておりまして、当時の有名なそういった茶道具を収集しております。その中にですね、臼杵鑑速が持っていた茶入れか何かをですね、手に入れていると。ですから臼杵鑑速は、そういった茶にもおそらく通じていた。ですからある意味では、大友氏の政治を司る能吏であり、文人としても深く評価できる人物じ

やないかと私は考えております。そういった人物がいなくなった大友氏というのが、衰退の道をたどっていくのだらうと考えています。そういった臼杵氏はですね、お兄さんが鑑続ですかね、お父さんは長景で全て大友氏の加判衆というか中枢部にいるんですね。そして臼杵氏は筑前の梶子岳城という所に城を預けられている。そういった筑前経営とも非常に関わっていて、つまり博多との関わりが強い。そういった中で、海外の情勢には通じているということだと思います。そういった環境の中で育った臼杵鑑速というのが、能吏たる所以だらうと思っています。そういう形で臼杵氏というもの、鑑速という人物に非常に興味を持っているということ、今日お伝えしておきたいと思っています。

牧 武富さんが言われる通り、筑前博多の経営は三人ですね。梶子岳城の臼杵氏、立花城主の立花道雪と養子の宗茂、大宰府の高橋紹運。福岡の西の方ですね、私も登りましたが梶子岳城。博多、筑前の方にいい武将がたくさん集まりすぎたと言うと語弊がありますが、それだけ博多が一番重要な拠点、最大の要衝という風なとらえ方もできるかなと思います。司会者に発言権はないですけど、立花道雪と立花宗茂を是非、忘れないで下さいと言いたいです。まあ皆さんにも、私は一人ひとりインタビューしたいんですけど時間がございませぬ。時間が迫ってきました。我々の大友氏顕彰会にアドバイスを一言ずつでけっこうですからお願いします。

#### ⑨ 大友氏顕彰会に期待するもの・・・アドバイス

鹿 アドバイスと言うより期待したいものということで発言させていただきます。二つほどあります。一つは、歴史と言いますと特に戦国時代のような時代は、勝った勝者が正しくて負けたら負けた奴が悪いんだという風な、いわゆる教科書にのっている日本、世界の歴史というのは勝者の歴史なんですね。それに惑わされずにその時代を見るべきだということを申し上げたい。大友家というのは、最終的には島津に負けて20何代続いていたんですけど豊臣秀吉の傘下に入って、吉統が最後朝鮮出兵で敵前で戦わなかったという口実をつけられて改易されるということで、いわゆる没落した、負けた、江戸時代の近世大名には発展し得なかった大名。だからと言ってその大友氏は鎌倉時代以来300年400年、20何代続いている、これだけ長期政権を維持できたことを評価せずに最後の負けたそこだけを取り上げて県民は「ああ大友、敵前逃亡したんでしょ」あるいは「島津に負けてだらしないじゃないですか」とか。そうじゃないと思います。その歴史の必然性とかあると思うんですけど、負けた大名の中にも存在してきた数百年間の輝ける歴史があるし、存在する価値観というのがあるわけで、できたらそういう所に焦点を当てて、最後は滅び江戸時代には続かなくて大分県は小藩分立の時代を迎えるんですけど、でも大友時代の400年間、これだけ豊後府内を中心に輝ける歴史を維持できたことを、むしろこっちに焦点を当てて大友氏を盛り上げて欲しいということです。

そしてもう一つは、この会は大河ドラマを目指すんですよね。私の拙い経験から少し申し上げると、6年ほど前ですかね、2004年の正月にNHKが90分の1本番組で正月時代劇を作ってくれました。「大友宗麟・心の王国を求めて」という松平健さん(が主演)、賤前直美さんが奥さんをしてくれた。みなさんもおそらくご覧になったと思います。大分県の視聴率が30%超えましたから当時のNHKの大分局長の浜田さんは凄く喜んでた。ただストーリーが悪かったんです。あの時に私は時代考証の仕事をさせていただいたが、脚本の方、NHKのプロデューサーと1年半くらい前から準備して、相談しながら、まあ大友宗麟のストーリーを描くのはもちろんです、原作者が遠

藤周作だからキリスト教の問題と言うのが主になってくるわけで、それは避けて通れないのであ  
いう暗い、僕からすればあまり成功ではないという感じになってしまった。あの時番組内でフラン  
シスコ・ザビエルが宗麟に次のように言う。「戦いは何の解決にもなりません。憎しみの連鎖を生  
むだけです」と。そこがあの番組のザビエルが宗麟に会って、宗麟の心の内面が変わっていくポイ  
ントとしてヤマ場に私たちは設定したんですけど、それがどういうことかと言うとあの時の時代相  
で、あの番組をつくるちょうど2年前ですか、2001年の9・11があったんです。アメリカが  
ああいう風にテロ攻撃に遭遇したと、それ以降のアメリカを中心とした世界が、反テロで戦争をア  
フガニスタンに仕掛けていきました。そういう時代相でやられたらやり返すという憎しみの連鎖が  
地球上に広がっていた。そういう時代相の中で番組を作らないといけないという、時代相の中で番  
組は作られるわけで、あの時2004年の正月時代劇・大友宗麟は、そういう流れの中で脚本家の  
古田さんが「戦いは何の解決にもなりません。憎しみの連鎖を生むだけです」という台詞をザビ  
エルに語らせ、それをきっかけに宗麟が宗教の世界にのめり込んでいくというストーリー展開にな  
ったんですね。それと同じように今後大友宗麟を大河ドラマにする、NHKに取り上げてもらうには、  
それは確かに歴史ストーリーとして大友氏をおもしろおかしく、楽しくあるいは悲哀をもって紹介  
するというのは大事ですけど、もう一つはやっぱり今の時代の中で大友氏を通して国民に何を考  
えてもらいたいかということをやっぱりアピールするものがないといけないと思います。それをど  
こに持って行くかはまた別ですけど、3・11に持って来てもいいんでしょうし、日本が復興する  
というような所に持って行くのも一つの手だと思います。とにかく歴史の事実だけではなく、そこ  
にどういうメッセージをこめて大河ドラマを目指していくかという所を考えていけば、きっと上手  
く行くんじゃないかと思います。

牧 今の後半の方は、私ども真剣に考え、今の時代をよく見て国民が何を欲しているかというのを見抜  
いていかなければいけないなど。これは時代と共に変わりますからね。大変なアドバイスをいただ  
いたなと思います。

武 鹿毛先生みたいに大河ドラマにつながるようなアドバイスはなかなかできませんけど、一般に大友  
氏に皆さまがこれだけ関心を持たれてこういう形で集まってらっしゃるということは、おそらくは  
自分の身近な関心、問題があって、今日これだけ私たちがしゃべっているが、皆さまの興味、関心  
を通じて、大友氏とそれぞれ考えていただければと見ています。それがこういった席で、皆さまた  
ちと議論を戦わせる中でこれまでにない大友氏の像というのが見えてくるのではないかと。単に政  
治史とか戦争の歴史ではなく、大友氏の文化とかそういった面で幅広く見て行けば、もっと豊かな  
大友氏像が生まれてくるんじゃないかな。それが今日のタイトルにあります大友氏の魅力につな  
がるんじゃないかなと私は思っています。皆さまもいろいろな形でがんばって研究していただければ  
という形でご助言にさせていただきます。

坪 それでは私の最後の画を出していただけますか。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私たち  
の大分の町というのは、実は1200年の歴史がある。遡れば奈良時代から始まったということに  
なっていますが、奈良時代、平安時代の400年間はよく言われていますが古国府と上野の地を中  
心に発展してきた。次の400年、今回のフォーラムの中心テーマになっています大友氏の400  
年は大分川西側の顕徳町、元町、錦町あの辺りを中心に展開してきたと。そして一番最後の400  
年は、この府内城（会場が大分文化会館）を中心に江戸時代から町が発展してきて近世、近代、町  
を展開してきた歴史がある。そういった意味ではですね20世紀から21世紀になってこの大分の

町というのは新たな400年周期をこの21世紀から迎えているのかなという風に個人的には考えています。(大分市地図の映像)折しもですね、(大分の中心地だったエリアを)円線で示していますが、400年、400年、400年と続いてきた。今後新しい400年が今から始まるんだということを考えさせられる。その中でですね大友館が400年ぶりに発見されたのが、1998年、20世紀の一番最後だった。そして大友館が国の史跡に指定されたのが2001年。運命的なもの示唆的なものを予てからずっと感じているところで、それは何を示しているのかなと個人的に考えた時に、おそらく大分の街づくりの新たな400年周期の始まりが21世紀から始まっている分けですが、その中で400年ぶりに発見されて皆さまの目の前に姿を現した大友氏の遺跡。これが何を意味しているのかなと考えた時に、今後の400年の大分市の街づくりの一つの重要なファクター、要素になっていくのではないかと個人的には考えています。そういった意味では今回「大友氏顕彰会」が立ち上がったというのも、今後の新たな400年スタートにあたって一つの大きな歴史なんだろうと思う。これが100年先400年先にまた一つ大きな(節目)があると思うが、こういう歴史があったんだ、だから400年後の我々(今から400年後の未来の人々)があつて、大分の街があるんだというような評価がいただけるような形で、非常に辛口ですがそういった部分を意識していただき、大河ドラマ化したあとも引き続きがんばっていただきたいなと思います。

牧 御三方、本当にありがとうございます。今日は役員が後ろで真剣に聞いておりました。5時を1分過ぎてしまいましたが、長時間ありがとうございました。今日感じたことを一言で言うなら、大友氏を語るにはあるいは学ぶには、時代的にも地理的にも世界史的なグローバルな見方で大友氏を見なければこの全容はつかめないというか、大友氏を顕彰できないという気がします。これはさらにもう一度、勉強していかなければならない。一つのことばかりにとらわれていても仕方がない。どんどん新しい情報が入ってくる時代ですから、そういう勉強をさらに行っていかなければいけないなと思いました。

今日、いろんな全貌の一局面が分かったと思います。今日たった2時間半で全てをご理解するというのは無理ですけど、いい参考になったという気がします。今一度ご3人の方に拍手を。どうもありがとうございました。皆さまもお聴き下さいましてありがとうございました。

完

- ・ 話言葉であったり聞き取りの都合上、やむを得ず意識したり、補足を加えている箇所、完全でない箇所等がありますが、ご了承ください。